

できない根深さを有している。それを承知した上で、なお価値中立的な進化の図式を模索しようとする努力は果たして可能かつ有意義なのだろうか。意義は、政治的な意図に沿わせたブラグマティックな宗教史の構成のうちにしかないのだろうか。

そのような判断へ向けた努力は、宗教の進化については放棄された。スペンサーの社会進化論とともに語らずに置くことが選ばれたのである。忘却によって問題は省みられなくなる。恐らく、宗教の進化という着想は、宗教の近代化という観念に置き換えられ、同じ難題が繰り返されることになった。世俗化や私事化といった問題が、依然として議論を引きつける部分があるとして、一方で、「進化論」としてのその難点は研究者を躊躇させる。しかし、あらゆる社会的動態を扱う研究は、進化論と同じ問題を孕んでいるため、この点は避けて通れない。かといって、もし社会的関心を放棄してしまうならば、現前する社会に学術的言説を通して介入するという、学問そのものの効果に対する評価も捨ててしまわなければならないだろう。そこで改めて「宗教の進化」に目を向ける必要性が認められる。

「宗教の進化」は、極めて多くのイメージを雑居させている。「宗教」を実体として捉えれば、そのまま「宗教」の進化は可能になるが、多くの場合、それは特定の教義や人々の観念の進化を意味していた。社会進化論と結びついた後では、社会進化におけるある側面が、それに該当していた。いずれにせよ、「宗教」という実体を想定しない限り、それは「進化」の内容に大きく依存することになる。特に、「宗教の進化」に関して、進化自体がなぜ起こるのかではなく、その順序と軌跡が専

ら議論の対象とされてきた。さらには、進化のメカニズム自体は生物学的な進化のアナロジーによって済まされてきたのである。そこで解釈が果たす役割が肥大化する。つまり、宗教の序列に関係する価値判断の問題はここに由来している。

社会の進化は、生物の進化に対する位置によっても区別される。二つの進化の分離は、社会進化における生物学的なアナロジーを導入しやすくとともに、客観的科学の装いをもつ生物進化から切り離されることによって、実践的道德的ニュアンスを社会進化的な記述に付与する。この二つの帰結からも価値判断の性格が生まれてくる。

しかし、進化の概念におけるより重要な区別は、進化が一つの位相で生じるものか、新たな位相の創発を伴うものであるかという点にある。前者にはダーウィンが、後者にはベルクソンが属する。このような区別は、進化を語ることの実践的意味に帰結する。

「信」と「虚構」に関する理論的研究

——分析哲学を手がかりに——

谷内 悠

「宗教」という近代ヨーロッパ的概念をその複雑な歴史背景から切り離し得ないことは、非ヨーロッパ世界における「宗教」を学問的に取り扱う際に避け難いアポリアとなっている。

第2部会

同様に近代がつくり出した「神話」という概念もまた、見直しが必要であると発表者は考える。例えば、「神話」が内包する「現実」性と「虚構」性については様々な議論があるが、その境界の脆さなどに対してはより包括的な視座からの研究の必要があるだろう。とりわけ日本神話研究においては、「現実／虚構」性に対する「信」の矛盾が、二者択一という本質的でない手法でしか問われてこなかった。さらにこの点は、現代の諸々の「信」(諸「宗教」と「自然科学」の関係など)においても再考されるべき課題であると言える。

よって発表者は、このような状況を扱うことのできる、脱ヨーロッパ的でより普遍的な独自の理論を構築したいと考えた。分析対象が「神話」物語のような「宗教『言説』」であるため、言語学的転回以降の潮流にある分析哲学を基礎とすることは妥当であろう。そしてまず、その代表的な哲学者であるW・V・O・クワインの「概念図式 conceptual scheme」という概念に注目した。「概念図式」とは、無秩序なままの経験を解釈し整理する図式のことを指す。そして、ある存在を受け入れるということは、それを理解することを可能にする「概念図式」を全体として受け入れることに他ならないとクワインは指摘している。つまり、「概念図式」が「現実」の存在を規定しているのであり、その概念を拡張すれば、「現実」と「虚構」は「信」に基づく「概念図式」の選択に応じて相対的であるのだと言える。

このように流動的な「現実」は、他者とのコミュニケーションにおける認識の「共有」という、証明不可能で無意識的な暗

黙の前提、延いてはそれに対する「信」によって、安定したものとなり得る。その「共有」における不確定性のエポケーなどを支えているものを、発表者は「メタ概念図式」と名づけた。それは、諸々のシチュエーションに応じて「概念図式」を選択し、はたらかせている。この、クワインにおいては明確化されていない二重構造によって、日常のコミュニケーションにおいて他者との合意を得られるような「現実／虚構」の峻別がなされ、「現実なるもの」がつくり出されているのである。

この二重構造には、「信」を軸としたダイナミズムが想定される。それは、経験に縁取られた「概念図式」が変化することにより、「メタ概念図式」もその影響を受け、それがさらに他の「概念図式」たちにも及ぶ、という循環関係である。ここには、「概念図式」レベルと「メタ概念図式」レベルという、二つの「信」の様態が見られる。そしてこれらがはたらくことによって、「虚構 make-believe」性をもつ「現実なるもの」の無根拠性が覆い隠されるのである。「信」とは、その意味で、我々がよって立つことのできるもつとも確固たる地盤、〈根拠〉のようなはたらきをする何ものである、と言えるかもしれない。

発表者は、「宗教」も含む広範な人間の営みを包括して捉え得るこの新たな「信」概念を中心とした理論によって、現代において「宗教」を考察する際の手助けとなることを目的としている。この理論を応用すれば、例えば、如何にして我々が現代社会における複雑な「信」の状態を可能にしているのか、といったことも言えるだろう。

そして何より、「信」によって二重構造の循環を促し、「現実／虚構」のあり方を人為的に揺るがすことは可能であり、とりわけ、「虚構」であるという了解があったにもかかわらず、意識的なダイナミズムの利用によって積極的に「メタ概念図式」を変容させ得、やがて「現実」へと影響を及ぼすようになり、それ自身「現実」の一部と化していくようなテキスト、そのような「概念図式」こそが、「神話」であると発表者は定義づける。

Philosophia perennis という概念の

歴史的変遷をめぐる考察

リアナ・トルファシユ

「永遠の哲学」とは、二十世紀の初め頃から、様々な思想家や哲学的・宗教的学派によって広く用いられるようになった哲学的な概念である。その明確な意味については一致した見解が存在しないが、一般に「ある主題が哲学の歴史の中を絶えず流れ続けており、また、ある不朽にして永続的な真理を、歴史上のいかなる時代における哲学書の中にも見出すことが出来る」という内容を指すものとして理解されている。現在「永遠の哲学」を代表すると自ら主張している学派の内でも最も有力なのは、ルネ・ゲノン、アーナンド・クマールスワミ、フリッツ・ヨフ・シュオンなどを中心として前世紀の三十年代頃に登場し

た、一般に「永遠の哲学派」と呼ばれているものである。彼らにとつて「永遠の哲学」とは、始まりをもたず、また様々に異なった知恵の表現において、それ自体として変わることはない形而上学的な真理を意味している。そして、こうした真理を歴史上のあらゆる時代における文書および口承伝統の中に見出すことが出来ると彼らは主張する。

既に二十世紀の中頃から、ハインリヒ・ツィマー、ミルチヤ・エリアーデ、ステラ・クラムリツシュ、アンリ・コルバン、ジルベール・デュラン、アントワーヌ・フェーヴルなどといった学者たちが、何らかの形でその影響を受けていた。また過去数十年の間に、とりわけ米国や英国で比較宗教学や宗教多元主義について研究している学者達の永遠の哲学派に対する感心が次第に大きくなってきた。永遠の哲学派の思想は宗教的なものであり、またその影響は宗教学の領域にまで広がってきている為、宗教学は同学派の主張をより良く知る必要があるように思われる。一方、「永遠の哲学」という概念自体が、それ本来の用法から現代における同学派の用法に至るまでに一体どのような歴史的変化の過程を辿って来たのかを明らかにする必要があるだろう。

本発表の目的は以下の通りである。一、現代における永遠の哲学派の思想に関し、その根本的な主張を要約すること。二、「永遠の哲学」という概念や、それに相当する他の表現の歴史を、過去へと遡って明らかにすること。三、以上の二点に基づいて、「永遠の哲学」という概念本来の用法と、現代におけるそれとを隔てる約四世紀の間に、同概念の宗教的な意味内容が